か　わ　ら　版 (新春号外)2025/01/吉日　発行	下関市立大学落語研究会 OB 会発行 編集長　　西川　隆喜

貧すれば　鈍することと知りながら

衣食足らぬと　騒ぐ民草　(NO 9,789)

(直訳) 人というものは一度贅沢の味を覚えると、貧しさの中でいかに誇りを持ち続け、どうすれば貧困を抜け出るのかという自立自尊精神を現代の日本人はほとんど忘れているようだ。

『謹んで新春のお慶びを申し上げます』

国内外でご活躍の下関市立大学落語研究会 OB・OG・準会員、ご家族の皆々様、謹んで新春のお慶びを申し上げます。さて、昨年は元旦より能登地方を中心に大震災が発生し、豪雨による追い打ちによりダブル災害を受けるに至りました。元々、石川県は文化などが異なる旧能登の国と旧加賀の国が廃藩置県を経て 1 つの県になりましたが、他の都道府県も事情は同じです。しかし、その後の日本はこれら文化、価値観、言葉の違いを乗り越えた経済的発展により、今では先進国と肩を並べる民主的な国になりました。国民が望む平和で心豊かな国づくりを託された為政者や政治家にはこの点を今一度理解して頂き、いち早い復興支援を望みます・・・。

そんなことを考えながら新しき年は平凡であることが良いとするのは私だけだろうか?

(編集局長)

【　最後の晩餐　】

（海峡ビュー下関）

『母(校)を訪ねて 3 千里(宮崎から 375 キロ)』

母校に尼子の作業トラックでないもう 1 台の高級車に乗り、**大塚**と訪問する。
するとなんと大学門に 1 名、爺さんの護衛がおり、誰でもは通さんぞという状態の中、足を一歩進め挨拶する。「こんにちは、市大の 50 年前の卒業生です。中を見学してもよいですか?」と・・・、ちょうど大学院の試験日でもあったので警戒態勢中だったが運よく OK を貰う。

それから付近を見渡すと、変わらないのは大学の校門の門柱だけ。門柱から中を見ると大きい建物がドンドンと何棟も建っていて超近代的な風景で圧迫感さえ感じる始末。スマホでバチバチ写真を撮りすぎて容量オーバー，カシャと音はすれども記録はできていなかった。大学をあとにして、いざ下宿先の校門から 50 メートル離れた竹内マンションへ直行するも建物はなく駐車場へと変わっていた。昔の面影は今いずこ。線路わきのスーパーニチイも姿を変え、毎日通い詰めたパチンコ屋や朝鮮料理店もなく、なんじゃこりや。

大学時代は、竹内マンションから右へ行くと大学へ、左へ行くとパチンコ店となる。まじめな**金ちゃん**の登校姿を目にしつつ、左のパチンコ店へ通っていた。
竹内マンションのパチンコ同好会 5 人組で夕方集まり、明日打つ台の情報交換会を開催し、

おかげさまでメンバー全員黒字の生活となっていた。一方、大学には代弁と出席チケットを提出の上、途中からパチンコ店へそっと逃亡という生活が続いた。
さて、時を戻そう。
15 名参加の最後の晩さん会では、馬鹿ばかり我先にしゃべり倒す。俺の話を聞け状態。タイムスリップして**間島**写真館の大学時代の髪がふさふさでスリムな体型のモノクロ写真を見て今と比較すると、気持ちは 20 代でも白髪が目立つ老人状態。ここまで OB 会が続いたのも幹事の**西川・青山**のテクニシャン 2 名の力量は素晴らしい。先輩のみならず後輩の参加も多数あり、若手にはそれぞれの得意分野を生かし引き続きこの会を継続してもらいたいし、この 2 名には大御所としてバックアップを期待したい。
　部外者である自分が OB 会 5 回開催中、5 回(皆勤)参加できたのもこの会が本当に楽しいからである。こんな笑いに包まれた OB 会は他に類がない。
また、来る者は拒まずの姿勢が良いし、オープンマインドも良い。
同室となった**沖井**からはピーチを使って沖縄 7 日間旅行に**晋平**といった話も聞けた。俺もピーチに憧れるな! 全然しまっていないがこれでおしまい。

(準会員 S49 年卒　有田　　格)

『OB 会感想メール』

　連絡遅くなりました。OB 会の後、実家のチェックに高松に移動したのですが、9 日朝、母が亡くなったとの連絡があり、福岡に U ターンして、翌日葬儀を行いました。そして、その日のうちに千葉に帰り、今度は四十九日の納骨の手配で忙しい日々を送っています。
　OB 会の感想ですが、まず私ら準会員までお招きいただき感謝です。
落研のメンバーはみんな華があり、場を和ませ、笑いの渦を巻き起こす才能を持った人たちでうらやましい限りです。10 年の上下の差も感じさせない一体感も落研ならではのものと感じました。今後も継続してもらいたいものだと思います。開催場所も学生時代を思い出させるところであり、個人的には今後も下関開催を続けてもらいたいなと思いました。以上、簡単ですが感想まで。遅くなりすみません。　　**(準会員 S49 卒 間島　健一)**

『市大落研ＯＢ・ＯＧ会ＩＮ下関に参加して』

昨年９月６日（金）～7 日（土）に下関で開催された、市大落研ＯＢ・ＯＧ会に初めて参加しました。当日は１５名の参加者がありましたが、先輩方とは、大学生の時も全く会話をした方がいませんでしたので、参加するまでは不安と緊張で一杯でした。一方、後輩２人との再会は楽しみでもあり、複雑な気持ちで姫路駅から新幹線に乗車しました。

昼前に下関駅に到着し、海峡ゆめタワーの地上143ｍの展望室から下関の街を眼下に眺めていると、４０年前の学生の時の記憶が次から次と蘇り懐かしく感じました。
唐戸で昼食をとり、そのあと巌流島からも市街と関門橋を眺め、国民宿舎に入る前に火の山にも上り、下関観光を満喫しました。タワー、巌流島、火の山から眺める関門橋は４０年前と同じでありうれしくなりました。
夕方６時から懇親会がはじまり、先輩方の落研創設時の苦労話や失敗談、笑い話など多くの話を伺いました。懇親会の雰囲気は落研時代の雰囲気そのものであり、楽しく過ごさせていただくとともに、初めて参加する私を歓迎していただき、ありがたく思いました。
また、先輩方から、これからは、私や後輩の歓白や連発の下の世代に参加を呼びかけ
幅広い世代が参加し、市大落研ＯＢ・ＯＧ会を盛り上げていくことが大事であるとの話があり、私もＯＢの一人として頑張りたいと思います。
落語については、演じることはあまり得意ではありませんでしたが、学生の時から桂枝雀の落語が好きで、よく聞いていました。社会人になってからは、神戸に上方落語の定席「喜楽館」ができてから、枝雀の一門である、桂吉弥や桂九雀、桂春蝶を中心に月に１度は寄席に出かけています。

学生時代は落語の勉強会はそれほど熱心ではありませんでしたが、社会人になり、数多くの寄席に参加することにより、落語の面白さが広がりました。ＯＢ・ＯＧ会の懇親会で落語の話で盛り上げられるように、さらに知識が深められたらと思います。次回の開催もぜひ参加したいと考えています。

どうか、皆様には健康に留意され、お元気でお過ごしください。

（会員 S58 卒　富永　善史）

『最後の晩餐感想』

2024 年 9 月 6 日（金）、「海峡ビューしものせき」において第 5 回市大落研 OB 会を行った。第 1 回は 2011 年 6 月に「市大落研創部 40 周年記念」と銘打って川棚温泉「お多福」において開催し、その後も 2014 年 4 月広島・鞆の浦、2016 年 6 月福岡・志賀島、2018 年 5 月大阪・河内長野と順調に実施してきたが、2020 年 5 月に予定していた第 5 回は新型コロナまん延で無期延期とした。
今回、念願の第 5 回を 6 年振りに開催でき、落研を立ち上げた 1974 年（S.49 年）卒から 1984 年（S.59 年）卒までの 15 名が下関に集まり久し振りに再会できたことは嬉しい限りであるが、この間に逝ってしまった仲間 3 名が参加できなかったことは悲しく無念でならない。
しかし、宴会に移れば「落研を同好会からクラブへ昇格させよう！」を目標に共に活動しこれを実現させた 1977 年（S.52 年）卒までの落研初期メンバー10 名の学生時代に戻ったノリでの古希超えパワーが炸裂し、1978～1984 年（S.53～59 年）卒の古希前 5 名を圧倒させ

てしまったようである。
1970 年（S.45 年）創部の我が市大落研は現在 54 年の歴史を刻んでいるが、佐賀大学、熊本大学の落研が廃部になったとの情報もあり、OB としては後輩諸氏の不断の努力により市大落研が活動を続け存続することを願うばかりである。

（会員 S49 卒　大塚　秋夫）

『海峡ビューしものせきの夜は更ける』

6 年振りの再会であった。皆一様に 6 年の歳を重ね、一段と白いものが目立つようになり更に薄くなった。小生は１０年前に癌を患ったが、うん良く抗がん剤治療が功を奏して生き延びることができた。そして鞆の浦で楽狂や皆と再会できたのは２０１４年の４月の事であった。さくらがいて楽狂がいて、たゆうもいた。そこで朗志から LCC の話を聞きそこから小生の LCC での旅は始まった。２０１６年に福岡でいつものようにバカ達の祭典があり、２０１８年には LCC で札幌へ行きその帰りに河内長野での懇親会に参加した。その時には、たゆうも元気で参加していたが、楽狂はさくらの具合が悪く参加できなかった。その時からの 6 年目である。コロナ騒ぎで前回の集まりが中止となり、やっと再会できたのである。久しぶりでも会えば一瞬にして落研時代に戻れるのである。久しぶりの再会は話に花が咲き大笑いして夜遅くまで楽しいひと時を過ごせました。落研というのはなんと楽しい集まりなのかと、改めて思わせてくれる夜でした。6 年間会うことのできない間に楽狂、さくら、たゆうと次々に仲間を失った悲しみはありますが、それでも笑いを楽しめるのは不思議な感じがします。きっとあの場には 3 人も参加していたのだろうなあと思わざるを得ません。だってお祭り騒ぎの大好きな楽狂たちが来てないはずはないものなあ。
我々が卒業して今年で丁度５０年、昨年落研を創立した楽狂がなくなって、一つの区切りがついたような形で、今回最後の晩餐という事で次の世代へとひきついでいただく事となりましたが、今も脈々と受け継がれている下関市立大学落語研究会と共にまた新しい世代の親睦会を続けていただく事を切に願っております。笑いと人情は永遠に受け継がれていくものだと思います、またいつか皆さんとお会いできる日を楽しみに『ご隠居さん』と呼ばれるような残りの人生を好きなように生きていきます。その力を今回十分に補給出来ましたので、しばらくは３６５連休を楽しんで生きて行けそうです。

（会員 S49 卒　沖井　孝志）

【編集後記】

コロナ禍による活動中止を余儀なくされ、あるいは物故会員 3 名を数え、底力を有する我がクラブでさえ、高齢者幹部による当会の運営にははなはだ不安を感じる状態となってきていました。よって、現下の幹事活動の一応の終焉として『学生時代を過ごした下関での最後の晩餐』と称す OB 会を開催したわけです。おかげさまで若手の濱本(東京)さん、大分中山(大分)さん、宮永(姫路)さん、今回は不参加であったが高知の今井さんを含め 4 名ともに現幹事より 10 歳若返りました。今後はこの 4 名を中心に OB・OG 会の開催及び「かわら版」の定期発行が落研を含め、大学 OB 会の発展と親睦に寄与していただければ幸いです。新陳代謝が行われない組織は陳腐化するのが世の習わしです。前幹部ももちろん協力は惜しみませんのでよろしくお願いいたします。

（編集長）